

被災地で学習支援を利用する中高生支援に関する研究（その2）

－グループインタビュー調査の再分析－

○ 旭川大学短期大学部 清水 冬樹（6541）

森田 明美（東洋大学・646）、小林 良二（東洋大学・345）、志村 健一（東洋大学・2388）、

キーワード：学習支援、ロールモデルの形成、第3の場

1. 研究目的

筆者らはこれまで、被災地において学習支援を利用している中高生を対象とした調査研究結果から、①将来に対する希望や自己肯定感を高めることに、学習支援の場が貢献しているといふこと（東洋大学福祉社会開発研究センター2015）、②学習支援の特徴として、学習支援の場にいる支援者から必要とされたり、役割を与えられたりすること（清水 2015）を明らかにしてきた。いくつかの先駆的な子ども支援の実践から、学校や家庭以外の第3の大人の重要性が指摘されてきたが（例えば西野 2012）、本研究においても子どもたちにとってその重要性を示すことができ、その役割の内容も明らかにすることができた。

しかし、計量的に上記のことを明らかにできたものの、学校や家庭が子どもたちにとってどういった存在なのであろうか。具体的な子どもたちと周囲の関係性について、改めて筆者らが明らかにしてきた結果を詳細に検討する必要がある。

本研究は、計量分析では見えてこなかった被災地の子どもたちと周囲の関係性を、グループインタビュー調査の再分析によって明かし、被災地における子ども支援の視点について提示する。

2. 研究の視点および方法

（1）研究の視点

子どもたちの自己肯定感や将来に対する希望に対して、社会資源や人間関係がどのように影響しているのかを探索的に把握する。例えば学習支援の場におけるどういった支援者の言葉が子どもたちの力になったのか、学校の友だちや先生との関わりが安心感や自信につながったのかなどである。

（2）研究の方法

本研究では、3回のグループインタビュー調査結果（以下「1次分析」）の再分析を行う。グループインタビューは録音の許可を得ていないため、報告者がその場でメモと概念図を作成しながら記録をしている。

1次分析では、作図ソフトを用いて概念図を作成した。しかし、この概念図は直線的な因果関係については把握できるものの、構造的な課題について把握することはできない。そのため、本分析では、得られたインタビュー時のメモと概念図を文章として書き直し、

理論的コード化(Flick2002:220-31)の手法を参考にしながら分析を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、東洋大学福祉社会デザイン研究科研究倫理委員会に対し研究倫理審査の申請を行い、許可を得て実施している。また、調査は保護者の同意を書面で得た上で、子ども本人の同意を得ている。インタビュー中、答えたくないものについては答える必要がないことを子どもたちに口頭で説明をしている。各団体で子どもたちを募集した時も同様に、文章で説明している。

4. 研究結果

ここではコアカテゴリーのみを示しながら結果を述べる。＜＞はコアカテゴリーを示す。

本調査の対象となった子どもたちは、震災を経験したことにより、地元貢献したいという強い意志を持つようになったという＜地元への貢献＞。子どもたちにとって、震災で親しい人を含めた多くの人の死を目の当たりしているが、震災の経験は辛いものであると同時に将来の自分の姿を考える機会となっていた。

しかし、そうした震災のことを話すことについて、子どもたちが住んでいる地域はそれを受け入れようとはしない。学校・友達・家族は震災のことを日常生活の中で語ろうとしない＜タブーとなった震災の経験＞。調査対象となった子どもたちであっても、特定の場所以外では日常的に口にすることはない。

こうした思いを受け止めてくれたのは、学習支援の場を含めた特定の間であった＜第3の間＞。進路の話をする中で地元貢献したいという思いを聞いてもらったり＜受容＞、支援者をはじめ多くのボランティアとの出会いから将来の進路について考えたりすることができたという＜ロールモデルの形成＞。同時に、自分の思いを言葉にする方法について＜第3の間＞で学ぶこともできた。一方で、不登校を経験した子どもたちが震災のおかげで＜地域のしがらみ＞からの解放されたことも語られた。

5. 考察

子どもへの支援は家庭や学校が中心となり、地域によっては、児童館のような地域にある社会資源や近隣の人々もその役割を担っていた。しかし、被災地ではそうした学校、家庭、地域が子どもを支える機能を十分に担えない状況にあることを、子どもたちの声から明らかにすることができた。こうした現状の中で、子どもたちの声に耳を傾けている学習支援のような第3の間は、子どもたちにとって非常に重要な居場所であり、役割を担っていることが示唆された。

※本報告は、平成26年度厚生労働省児童福祉問題研究事業（課題1）の助成を受け、東洋大学福祉社会開発研究センターによる「高齢者、障害者、子どもの社会的孤立に対応する見守り支援・自立支援に関する総合的研究」の一環として行った。調査に協力してくれた子どもたちと、子どもたちを支えている各支援団体に感謝申し上げます。ありがとうございました。